

64

働く人々と木賃宿
●大都市の底辺世界

岩田 浩太郎 (山形大学助教授)

大阪日本橋の今と昔

大阪市街を堺筋に沿って南へ歩いていくと、日本橋の巨大な電器店街に達します。その中心部

の日本橋三丁目五丁目は家電製品やカメラ・パソコン・ゲームソフトが店頭や店内に所狭しと並び、関西の電器製品販売の中心地として現代の大阪の一つの顔となっています。堺筋から少し脇へ入ると、戦前から続く「五階百貨店」など、中古品・日用雑貨品を安売りしている大衆市場があり、また、ビルに挟まれながら木造家屋群も数カ所残っています。現代的な巨大ビル群と破壊されつつある地域住民の生活世界が同居している町です。

この日本橋三丁目五丁目界隈は、かつて下層民衆が集住する町として有名でした。江戸時代、この辺りは長町六丁目九丁目という町でした。当時の大坂市街の南端から南へ突き出た形の細長い町で、泉州(大阪府)に通じる街道の両側に沿って家屋が並んでいました。この町のようなすを検討するうえで重要な史料が大阪商業大学に所蔵されています。一七九一年(寛政三)の古文書で、木賃宿の名前・部屋数・宿泊者の内訳などが書き上げられているものです。表にその内容を一覽にしました。当時、長町六丁目九丁目には合計三九軒の木賃宿があり、とくに七丁目九丁目を中心に木賃宿街が形成されてい

たと考えていいのではないかと思います。

木賃宿に住む人々

表を見ると、三九軒の木賃宿に合計一四〇〇人以上の人々が宿泊しています。その内訳は「働人」(日雇労働者、たとえば米踏

人) 精米の日雇などが中心で、「浜立女」(浜忍女・辻君ともいう、売春婦)や「袖乞」(ものもらい、乞食)も泊まっていました。古文書にはこれら継続的な宿泊者のほかに、一夜限りの宿泊者として諸国から来た旅人が日々約二〇〇人は泊まっていると書いてあります。

各宿の部屋数は、平均すると約二七部屋で、五三部屋をもつ大きな宿もみられます。部屋の高さについては「二畳余に仕切り候部屋」と書いてあります。一部屋の平均宿泊人数を旅人を含めて試算すると一・六人になります。二畳余に二人弱というかなりの密度です。宿料(宿泊代)については、「部屋一軒へ一夜蒲団一帖入」れて泊まる場合の代金は五四文、同じ部屋にもう一人泊まる場合は一〇文増し、布団を増やす場合にはまた追加を払う、というシステムでした。

この時、浜立女のうちの三〇人ばかりは病気で寝込んでいたことも確認できます。雇われ先に通い、夕方に仕事から帰って来る働人たち、白粉の臭いをさせる浜立女、袖乞に行き来する男女、長煩の病人や身体障害者など、日雇労働者と底辺民衆が密集し、生活空間をともししていた木賃宿街の世界が、古文書から浮かび上がってきます。

長町の「グレ宿」

幕末に書かれた『守貞漫稿』によれば、長町の木賃宿は「グレ宿」とよばれていた。長屋を仕切った一部屋は間口六尺・奥行九尺と狭く、古畳が敷かれた部屋の備品は土鍋一つだけで、もっぱら乞食人が泊まっていると、その劣悪さに注目していま



現在の日本橋4丁目(大阪市浪速区) ▶
かつて長町といわれていた。
ビルに挟まれて木造家屋群がみえる。



日本橋付近図 ▶

木賃宿名	部屋数	宿泊者内訳(人数)		
		働人	浜立女	袖乞
長町六丁目 木津屋源兵衛	30	40	20	
長町七丁目 山家屋久右衛門	28	33~4		
綿屋重兵衛	19	30	5~6	
灘屋源兵衛	25~6	25~6	8~9	
和泉屋庄兵衛	22	18	1	4
大和屋市太郎	29	20	3	12~3
中村屋与兵衛	22	11	2	8~9
山田屋伊兵衛	40	37~8	3~4	
尼ヶ崎屋長次郎	22	20	10	10
抜板屋文右衛門	25	25~6	3	
天王寺屋太右衛門	22	10	1	7~8
樫木屋弥七	30	20		10
万屋宗兵衛	28	30		7~8
太子屋徳兵衛	13	21	2	
長町八丁目 樫木屋儀兵衛	25	20		10
万屋平次郎	27	30		10
寺嶋屋吉右衛門	31	34~5	2	14~5
堺屋多助	18	27~8	2	
帯屋儀右衛門	20	30	2	10
八幡屋徳松	50	30		27~8
河内屋乙吉	13	17~8		7~8
淡路屋作兵衛	33	20		11~2
井筒屋伝右衛門	53	40	7	30
若江屋喜八	32	50	1	
伊丹屋他人	27	17~8	3	7
伊丹屋長兵衛	27	17	1	20
八幡屋新兵衛	29	40		17~8
長町九丁目 八幡屋久兵衛	48	30	2	10
金屋金十郎	19	10	1	12~3
木津屋弥兵衛	18	30	1	9
虎屋弥兵衛	26	20		10
大和屋藤助	13	23	2	10
木津屋定吉	24	30		10
八幡屋嘉兵衛	20	30	1	17~8
紀伊屋徳兵衛	20	20	2	7~8
大和屋彦兵衛	39	30	3	14~5
伊丹屋捨松	21	30		10
明石屋宇兵衛	30	40		10
樫木屋善兵衛	21	30	2	6~7
凡 1400人余				
39軒		内 浜立女 96~7人 袖乞男女 360~70人		

たといえます。そして、このような特徴をもつ長町の形成自体が、幕藩制的な都市の構造が変質し、解体に向かいつつあることを示していたといえましょう。

長町は明治維新後に「大阪の最暗黒」と称されるスラムとなり、そのようすは鈴木梅四郎の『大阪名護町貧民窟視察記』や横山源之助の『日本之下層社会』などにあきらかです。一九〇三年(明治三六)に内国勧業博覧会が大阪で開催される際に、この地区は現在の西成区愛隣地区に移転しました。

◀大坂・長町6~9丁目木賃宿一覽 [1791年(寛政3)10月]
(注)太子屋のみ肩書は、「木賃宿旅籠屋」(他の肩書は「木賃宿」)。また、¹⁾の数は、実際の合計数と必ずしも合わない。(大阪商業大学商業史研究所蔵 佐古慶三文書)より作成。

す。長町は「グレ宿」が集まる町として発達し、また差別視されていたことがうかがえます。

長町六く九丁目目が特徴的に発達した背景には、幕府の都市政策もからんでいました。大坂町奉行所は一七世紀の半ばに、道頓堀宗右衛門町・立慶町・長町一く二丁目に木賃宿の設置を許可し、貧者の便とする政策を打ち出していました。その後、これらの町が芝居小屋や茶屋・旅籠屋・貸座敷、魚屋などの集まる町として発達したために、木賃宿が集まる場所はさらに街道沿いに南に移っていったと思われまます。泉州、紀州(和歌山県)への通行や伊勢(三重県)への参詣の便もあって旅籠屋が建ち並ぶ長町界限にあつて、とくに南端の長町六く九丁目目がより下等の「グレ宿」に木賃宿街として発達してききました。こういった動向をふまえて、町奉行所は長町六く九丁目目の木賃宿以外の者が「無宿空人別之者」(町や村の人別からはずれた住所不定の者)を宿泊させることを禁ずる町触を出し、破産や失業などで無宿となった貧窮民を長町の「グレ宿」に集住させる政策をとつていったのです。

長町の木賃宿は「無宿空人別之者」を宿泊させて宿料をとるほか、彼らを働人と日雇い入れの町として大坂市中の搦米屋・酒造屋・絞油屋や荷物運搬業者などに紹介・斡旋し、判代(世話料)をとる口入れ業も行いました。無宿人の口入れ業は長町宿屋に限って認められました。雇用された働人は長町から通つたのですが、雇われ先の場所によっては通勤に時間がかかりすぎて不便なので、一八五九年(安政六)には出先の宿泊所として働人足溜所を設けることもしています。

このように、長町は大坂の日雇労働者の職業斡旋の場所としても重要な役割を果たしていたのです。増加する貧窮無宿人を集中管理して都市の治安を維持する一方、産業の発達にともなう日雇労働需要の増大に対応し供給する役割を果たす、当時の大坂市制上不可欠の町として長町は位置づけられてい

日本の歴史を解く100話

一九九四年九月一〇日 第一刷印刷
一九九四年九月二〇日 第一刷発行

編著者 吉村武彦 池 享
吉田伸之 原田敬一

発行者 益井欽一

印刷所 大日本印刷株式会社
発行所 株式会社 文英堂

東京都新宿区岩戸町一七 千162
電話〇三(三)二六九 四二三一(代)
振替〇〇一七〇三二八二四三八
京都市南区上鳥羽大物町二八 千600 91
電話〇七五(六七二)三二六一(代)
振替〇一〇二一六八二四

本書の内容を無断で複写(コピー)・複製することは、著者および出版社の権利の侵害となり、著作権法違反となりますので、その場合は、前もって小社あて許諾を求めて下さい。

ISBN4-578-00372-8 C0021

◎ 1994 吉村武彦・池 享
吉田伸之・原田敬一

Printed in Japan

●落丁・乱丁本はお取りかえします。

〈編著者〉

- 原始・古代…吉村武彦(よしむら たけひこ) 一九四五年生 明治大学教授
- 中世…池 享(いけ すすむ) 一九五〇年生 一橋大学教授
- 近世…吉田伸之(よしだ のぶゆき) 一九四七年生 東京大学教授
- 近代・現代…原田敬一(はらだ けいち) 一九四八年生 佛敎大学助教授